火山と温泉の国・ニュージーランド

八木　健三

北海道に似た北島、本州を思わせる南島この二つの島からなるニュージランドは南の楽園ともいわれている。面積はあわせて二七万平方キロ、日本全体の約七割強の国土のなかに北海道人口の半分のわずか二六〇万の人々がいるだけなのだから、いかに人口が稀薄であるか想像がつく。漠々とつらなる草原の中に、見えるものは羊の群と牧草だけ……という光景が、いたるところに展開されているのもこのお国柄といえよう。

私がこの国を訪れたのは一九六五年十一月から十二月、国際火山学会議に出席するためだった。この会議は二、三年おきに各国でひらかれているが、一九六二年には日本が開催国となり、会場を東京、軽井沢、箱根と移しておこなわれた。手前ミソのようだが、この学会は大へん好評であって、こんどニュージーランドの学会でも、日本に来た多くの知己にあったが、いずれも日本での学会が成功だったことをほめてくれた。

ニュージーランドの火山学会議もこの日本方式にならって、開会式はオークランドでおこなわれたあと、ロトルア、ワイラケイにうつり、最後は首都ウエリントンで会を閉じるというふうに、北島を縦断するように会場をかえた。そのため、私達はいつも新鮮な雰囲気の中で、会議をすすめることができたのは幸いであった。

そのあとの見学旅行で南島を訪れ、結局四週間の間に、私はニュージーランドの主な地域を一巡することができた。

ここではそのうち、火山と温泉の島である北島についての印象を記してみたい。

ニュージーランド最大の都市であり、空海の交通の中心であるオークランドは、海に面したいくつかの丘にひろがる明るい都会だ。この町を歩いてみると、どの家も大体同じような赤い屋根の平屋建、家のまわりには手入れのよくいきとどいた芝生がとりかこみ、花壇には南半球の春をつげる美しい草花がさきみだれている。立派な豪壮な邸宅はみられないけれど、同時にひどいスラム街も、またどこでもお目にかかれない。すべての人々が大体同じような生活をおくっているのである。

その後ニュージーランドを旅行している間じゅう、どこでも同じ印象をうけた。このことは、ニュージーランドが世界でも有数な社会福祉国家であることと密接なつながりがあることだろう。その点では、スウェーデンやノルウェーなどのスカンジナビア諸国とも共通したものをもっているのだけれど、うける印象というものはいくらか異なっている。これは一つにはニュージーランドがより赤道に近く、より明るい陽光にめぐまれているためであろう。

芝生や花壇の手入れの、いきとどいていることには感心させられる。よく街ぐるみ単位の庭園美コンクールなどもおこなわれているという。〃ニュージーランド・ハズバンド〃とよばれる哀れなハズ連は、隣り近所への対抗意識にもえている奥さん連に尻をひっぱたかれ、土日の週末は必ず庭仕事にひき出されている。私の友人なども、大いにそのフンマンをぶちあけていた。

もう一つ…ニュージーランド・ハズにとって気の毒なのは、すべての酒場が五時から六時の一時間しかあいていないこと。サラリーマンは、オフイスがひけるとかけ足でパブ（公衆酒場）にかけこみ、ビールをぐいぐいとあおる。おやじはビヤだるにつけたホースの口から、ジャーッとジョッキーにビールをついでよこす。色気の、サービスの、というゼイタクなどいっておられないどころか、六時になると、ピタリと扉をしめて客をおん出してしまうという始末。

この営業時間延長をはかる法案はたびたびの国民投票で否決されていたが、昨年の国民投票で、ついに九時か十時までの延長がみとめられるようになった。呑んべえのなげきもいまは解消したことであろう。

ロトルアは北島の北海岸に近いロトルア湖畔の小さな都会で、まわりにはたくさんの温泉が湧きでている。町にはいくつかのバス・ハウスがあり、主として医療に用いられ、いろいろの成分や、温度の浴槽があり、医師の指導のもとに浴用している。なかでも美しいのは、ロトルア公園内のバス・ハウスだ。大きなホテルを思わせるような赤い屋根の大きな建物の中に、いくつかのバスのほかに温水プールなどもある。この公園内には〃屋外玉突き場〃があり、きれいに刈りこんだ芝生の上を、大きな黒い球をころがして遊んでいるのが珍しい。

このロトルア近郊には、ニュージーランド原住民のマオリ族が大勢すんでおり、とくにワカレワレワにはマオリ族の部落がある。その入口には、マオリの昔語りをつたえるエキゾチックな彫刻の門が建っており、内部にはマオリ風の住家や集会所などがある。マオリというのは、太平洋に点在するミクロネシア系の海洋民族であり、かつては白人との間に戦争もあったが、いまは平和共存の体制で、あまり差別待遇などの問題はない。そして、盛んに白人との間の混血もおこなわれ、大体、北海道のアイヌに共通したような環境におかれているようである。

私達がここを訪ねたときは、キヴイというニュージーランド特産の、翼のない鳥の羽毛であんだ特別製の着物を着た老女が、さかんにまくしたてるようにマオリの話しをしてくれた。その話しを聞いていうちに白老のアイヌコタンの老酋長の弁説を想い出した。

ここにはまたいくつかの間歇泉がふき出しているが、そのうちもっとも大きいのはポフツ間歇泉で、珪華の沈澱した湧き口からふき上げる熱泉は二〇mをこえる。米国イエローストンの有名なオールドフェースフルの間歇泉にはおよばないが、なかなか迫力がある。また泥火山も多く、にえたぎった泥がブツブツとふき出しているのは面白い。

ロトルアの東方のタラウェラ湖畔には、

タラウェラ火山がある。湖にのぞんだその姿は、支笏湖畔にそびえる樽前火山によく似ているが、さらに面白いのは、その頂上にドームがあり、これが一九〇九年にできた樽前ドームと、その形も構造も大へん似ていることだ。

この火山の一八八六年の大活動で、たくさんの爆裂火口や割目ができたが、その山麓のものは特に大きく、いま、南火口、エコー火口、インフェルノ火口などをつくっている。このうちエコー火口には、温泉をたたえていつも湯気を出している〝フライパン湖〟があり。その最高温度は六七度にも達している。かって一九〇三年ごろにはここに大きな間歇泉があり、ふき上げる黒い泥水は高さ一五〇mに達し、世界最大のワイマング間歇泉とよばれたが、いまはそのあと方もない。

インフェルノ火口には〝ルワモコのの〟とよばれる、やはり熱湯をたたえた池がわきたっている。南火口には、いまはつめたい湖があり、その水面には何という藻であろうか、じつにあざやかなエメラルドグリーンの藻が一面に繁茂し、大きな羊歯の木々の間にあやしげな美しい光景をつくり出している。

これらの火山や温度の活動は、火山国にいる私達にもまだ未知のものが多く、じつに興味深かった。また火山学上で興味深いのは、これらの湖のまわりに厚く発達する軽石の堆積層である。同じものが北海道でも洞爺湖や支笏湖などの、いわゆるカルデラ湖のまわりにあつく発達し、軽石流とよばれている。

ニュージーランドのものは古くイグニンブライトと命名されたが、いまはこの用語が広く世界的に使用されるようになり、こんどの火山学会議でのシンポジウムの一つのテーマは、このイグニンブライトに関するものであった。何百立方キロにもおよぶような、莫大な量のイグニンブライトがどのような機巧で噴出され、地表にひろがってゆくのか……という疑問は大へん面白い問題であるが、このイグニンブライトの本場で、世界各国の学者と現地討論することができたのは大へんな収穫であった。

ロトルアから私達は北島の中心に、瞳のようにひらいたタウポ湖畔のワイラケイに移動した。ここもまた地熱地帯の中心であるが、ここで大へん興味あるのは、この地熱を利用して盛んに発電していることであった。

火力発電では石炭や重油をたいて蒸気を得て、これでダービンをまわしているのに対し、地熱発電というのは地下からの蒸気を直接利用しているもので、その本家はイタリアのルラデレロであったが、いまはニュージーランド、アメリカ、それに岩手県の松川付近でも盛んに発電されるようになった。ニュージーランドはこのワイラケイだけであるが、現在のところ十九万キロワットの発電所が設立され、発電をおこなっている。

地熱発電といっても発電所そのものは普通のものとあまりちがわないが、地下にボーリングして得た高温高圧の水蒸気を捕集し、これを太いパイプで発電所まで運んでゆくのがちがうだけだ。大地をゆるがすすさまじい号音。冷却塔からはげしくふき出す純白の水蒸気。その壮観は、地下にひそむ熱エネルギーの大きさを暗示する。現在でもこのワイラケイの地熱発電量は、北島の発電量の二〇パーセントをしめるといわれるが、将来はさらに増大するであろう。

感心するのは、こうした工業用の使途と、自然の保護とがあまり矛盾なく共存していることである。しかしここでは、それはあまり驚ろくほどのことはないのかもしれない。なにしろ人間が少なすぎて、開発ができないでいるこの国では、多すぎる人間が小さすぎる国土にあふれている日本のように、自然の破壊されるおそれはもともと少ないのだろう。

タウポ湖の南にそびえるトンガリロ火山群は、北からトンガリロ、ナラホエ、そしてルアペフの三つの活火山からなっている。タウポ湖北岸のワイラケイから直径三〇キロの湖をへだてて眺めると、これらの火山が亭々とそびえるユーカリの巨木の間に、青い湖に影をうつしてそば立っているのはすばらしい光景である。

頂上に大きな火口をもつトンガリロは頭を切られた円錐状なのに対し、ナラホエは富士山そっくりのみごとな円錐型火山。ルアペフは上の二つよりはかなり削られた形をしているが、上半部は白い氷河におおわれ、その中に温泉のわき出る湖まである。ビキニスタイルの娘さんが氷河で夏スキーのあと、この温泉の湖にとびこんでいるポスターがほうぼうに掲げられている。

私達がワイラケからウエリトンに向う日タウポ湖南方の小さな町、ワイオウルからルアペフの全容が望まれた。真白い氷河の中にいくつかの黒いピナクルがそびえ、黄色のエニシダの咲きみだれる草原の上に輝いているのは、印象的な眺めであった。

（北大理学部教授）